



フランスで最も美しいリボンを生産したサンティエヌの1898年の模様のあるリボン。ここはリボンと織物、武具と炭鉱の町で、そのすべてが織り込まれている。

作家
森まゆみ

文明開化の リボン

「のこぎり屋根」の工場で見つかった



特別企画

菅野健児・撮影
photographs by Sugano Kenji

The Last
Rose of Summer



WILL NOT LEAVE THEE, THOU LONE ONE,
TO PINE ON THE STEM;
SINCE THE LOVELY ARE SLEEPING,
GO SLEEP THOU WITH THEM;
THUS KINDLY I SCATTER
THY LEAVES O'er THE BED,
WHERE THY MATES OF THE GARDEN
LIE SCENTLESS AND DEAD.

SO SOON MAY I FOLLOW,
WHEN FRIENDSHIPS DECAY,
AND FROM LOVE'S SHINING CIRCLE
THE GEMS DROP AWAY!
WHEN TRUE HEARTS LIE WITHER'D,
AND FOND ONES ARE FLOWN,
OH! WHO WOULD INHABIT
THIS BLEAK WORLD ALONE?

MOORE



東京下谷・本郷に広大な土地を
持っていた実業家・
九代目渡辺治右衛門えもんの四男、渡辺四郎が、
明治の終わり頃から大正にかけて
谷中で営んでいた
「千代田リボン製織」。
その工場の解体にあたり、四郎が
欧米で集めてきた華麗なリボンと、
東洋一を目指した国産リボンの
「見本帳」が見つかった。
明治大正期の日本の欧化の歩みを示す、
貴重な資料でもある谷中のリボンと
渡辺四郎について、
谷中・根津・千駄木の歴史と今を
書き続けてきた森まゆみさんが解説する。
アイルランド民謡「The Last Rose of Summer」の
詞と楽譜が織り込まれた装(右)。
日本の唱歌「庭の千草」の原詩にあたる。



帽子をかぶって写真に写った初めての日本人とされる渋沢栄一のシルクハット姿。渋沢は徳川昭武に従って幕末にヨーロッパを回り、近代的な会社制度などを日本に導入した。



89 文明開化のリボン



「郵便馬車」や「イエス・キリスト」「イギリスのエドワード7世のプロマイド」などさまざまなリボン(上)。どちらの花も一見刺繍のように見えるが裏を見ると織物であることがわかる(左)。

か寂しく見えました」と言っている。この日本髪は鬢付け油で結い上げるもので、寝る時などは箱枕を使って崩れないようにする、結うときに髪を強く引く張るため頭の真ん中にハゲが出る、第一不衛生だ、ということ、近代化の中で「日本髪を止めて洋髪にしよう」という運動が起こる。マーガレットなど束髪の髪型が考案され、リボンが欠かせないものになった。一つの世も流行を先導する女学生は矢絨の着物に海老茶色の袴をはき、髪は束髪で、後ろに垂らし、頭のとっぺんに大きなリボンをつけるのが定番である。当時、リボンは舶来で、高価だった。リボンは女性のためだけのものではない。当時、紳士たるもの、無帽では歩けず、冬はソフト(中折れ帽)、夏は麦稈真田(麦わら)やパナマ帽などをかぶっていた。夏目漱石の『道草』にはかつての養父が無帽で現れることが繰り返して書かれている。帽子を被ら



ヨーロッパでは物語の一場面を布地に織って、写真や絵画のように額に入れて飾った(84頁中央も)。



一緒に、美しいリボンの見本帳が十数冊あった。これらのリボンや専門書は、岩橋リボンに入社し、のちにそれを引き継いだ千代田リボン製織社長、渡辺四郎が集めたものである。リボンとは端に耳のついた細幅織物のことを言い、織りマーク(タグ)もこの範疇に入る。一般にいう髪や帽子を飾るリボンの概念を超えるような、複雑な織のものが多数含まれている。例えば、反復織ではあるが、一つずつ切り離して、壁の装飾や額に入れて飾ったようなもの、大統領の就任パーティの日付やメニューを織り込んだもの、記念のエンブレムなどなど。リボンの模様やテーマにば時代が透けて見える。アールヌーボー、女性が大仰なドレスを脱ぎ、軽装で社会で活躍し出した時代、第一次世界大戦の最中、銃後を守る女たちは男性労働の分野に踏み込み、工場や鉄道で重い機械を動かした。そんなあれこれリボンに詰まっている。残念ながら一つ一つのリボンには、何らコメントがない。誰が、いつ、どこで作ったものかはつきりしない。さかのばれば、江戸から明治にかけて、女性は髪をかんざしや手柄、櫛で飾っていた。樋口一葉の思慕の人、朝日新聞の小説記者であった半井桃水は一葉の印象を「髪に飾りが無いのがなんだ

今

はよみせ通りという賑やかな商店街に昔は藍染川という川が流れていた。

これは下谷区（現在の台東区）と本郷区（現在の文京区）を隔てる川で境川とも、上流では谷田川とも呼ばれた。よみせというのももちろん夜店のことであって、戦後の昭和三十年代まで、夜店が出ていたのを子供心にうっすらと覚えている。川の方は大正の大震災後に暗渠化された。

その藍染川が、「日によって赤かったり、青かったりした」（佐藤龍蔵さん）という話を聞いたのは今から三十年以上前、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を創刊した頃である。明治時代を覚えている古老が町にまだ結構おられて、「夏は川端で夕涼みした」「ツバメが川面を低く飛んだ」「死んだ赤ちやんが流れてきて大騒ぎになった」などと口々に想い出を語っていた。水の色が変わったのはなぜだろうか。追究したところ、川沿いにリボン工場があつて、その日の染めるリボンの色によって、水の色が変わったのだという。

谷中初音町四丁目（現在の谷中三丁目）に岩橋リボン製織が創立されたのは明治二十七年（一八九四）年、日本初の国産リボンを生産した記念碑的な会社である。創立者の岩橋謹次郎は白木屋の支配人で、帽子が飛ぶように売れ



ヨーロッパで19世紀後半に流行した黒地に花模様をあしらったものから、ピロード織、レース織など、さまざまな織り方を各頁に貼り込んだ見本帳（次頁も）。

ることから、国産リボン製織の必要性を痛感したのではあるまいか。藍染川の水の使える建設地は昔、蚩沢といった卑湿の地で、蓮の咲く沼地であった。川沿いにはそうした川を利用する工場が結構たくさんあった。

工場の代名詞「のぎり屋根」

その工場はのぎり屋根の工場で、北側に窓がついていた。北側からの光は影を作らず、糸や織地、模様や色がよく見えるのだそうである。桐生や倉敷、富岡もそうであつて、のぎり屋根といえは工場の代名詞である。この建物は奇跡的に数年前まで残り、「旭プロセス製版」という印刷所が事務所として使っていた。よみせ通りを行き交う人には目の底に残る建物だ。

二〇一三年、地主の鈴木さんが、マシオン会社に土地を売ることになった。現地保存の道を探したが叶わず、重機で解体するのと並行して丁寧に解体した部材の一部を、濹澤倉庫の厚意で保管していただくことになった。工場の解体から一年後、敷地内に残っていた事務所も壊すことになり、棚にあった書籍類百二点を廃棄するという前日、「谷中のこ屋根会」の山崎範子が会に譲り受けた。その中に製本された自筆ノート、織維関連の技術専門書と



ないことは社会的な零落を意味した。その帽子に巻くのに、黒や白のグログランリボンが大量に必要だった。もっと言えば、駅員、巡査、水兵、士官の制服や帽子、すなわち日本の近代官僚制や軍隊、すべてに大量のリボンが必要だった。

こうした中、渋沢栄一は輸入を食い止めなければ日本の富が外国に流出すると考えた。明治二十二（一八八九）年、小石川区永川下に渋沢らは日本製帽という会社を設立。五年後の明治二十七（一八九四）年、日清戦争の年に先に述べたように岩橋謙次郎が岩橋リボンを下谷区谷中初音町四丁目三十八番地に創立。

これに技師として入社したのが、渡辺四郎である。明治十三（一八八〇）年生まれ、東京府立開成尋常中学校（今の開成学園。徴兵を猶予されるので一時、公立だった時期がある）などを経て東京高等工業学校（今の東工大）に学び、岩橋リボンに入社、明治四十三（一九一〇）年、織物研究のため渡欧。帰国後もリボンや参考資料を集めた。

余談だが、姉婿の渡辺六蔵（東京瓦斯社長久米良作の弟）は東京帝大を出た優秀な鉄道技師だったので、その影響を受けて、学生時代から鉄道写真に興味を持った四郎は、友人の岩崎輝弥

ある。残された四郎の子供たちはまだ幼く、妻はまだ若かった。令嬢下部秀さんは「父が亡くなった時に私は数えの六歳で、下に三人の弟がいました。子供四人を抱えて、母は大変だったと思います。私も父のことをよく覚えていません。というのも父は潔癖性で、子供が抱きついたりするのも嫌いました。そんな父がチフスで亡くなったのも不思議ですが、一切他の事業には関係しておりませんでした。それでも渡辺家は結束の固い一族で、その後の世話もしてくれたいと思います」と私に語っている（『明治東京崎人傳』新潮社刊、現在は中公文庫）。

譲り受けた資料の中には四郎の書いたノートもあり、その綿密で几帳面な人柄がうかがえる。四郎の亡き後、千代田リボンは渡辺一族系列企業として継続し、関連企業にも名を連ねる八田熙が取締役となった。

ところが六年後の昭和二（一九一七）年、東京渡辺銀行、あかち貯蓄銀行は経営破綻し、その関係会社も渡辺一族の手を離れた。昭和恐慌の始まりであった。リボン工場は四郎と同時期に技師として入社した鈴木哲に移管され、一九六六年まで生産を続けた。その後ものごぎり屋根の工場は壊されずに二〇一三年まで存在した。

解体をきっかけに出てきた織維関連



見本帳の外見(左、上)。渡辺財閥四男の渡辺四郎は鉄道写真のコレクターとしても有名(右)。洋服などにつけるブランドのタグとして織られたもの。織ネーム「MITSUCOSHI GOFUKUTEN」の名称は1904~28年に使われていたという(右下)。



台東区谷中3丁目に2013年まで建っていた、明治ののぎり屋根工場。

撮影：ほつたんじ

とともに著名な写真家小川一真を連れて鉄道写真の撮影にあたり、現在鉄道博物館に「岩崎渡辺写真コレクション」として収められている。

写真で見る渡辺四郎は、顔立ちの整った、上品な紳士である（右上の写真）。この渡辺家について、多少、記したい。もともと兵庫の明石の出身で、いつの頃か、江戸に出て、海産物問屋、明石屋治右衛門として身代を築いた。明治維新後、その巨万の富で東京の土地を買ひ、三菱、三井などに次いで東京で五番目の地主となった。系列の会社は数十社に及んだ。渡辺財閥の本社は日本橋にあったが、渡辺本家は最初上野花園町にあったため、谷根千（谷中・根津・千駄木）との関わりが深い。一帯に渡辺家は広大な土地を持っていた。九代目治右衛門がなくなると、未亡人ふみは、谷中真島町の隠居所で暮らした。不忍通りから屋敷までは当時としては広い道が付いていた。反対側の現在の大名時計博物館の場所は、娘婿六蔵の屋敷であった。

一族の中で、渡辺四郎が、不動産や銀行よりリボンという世界を選んだのはちょっとユニークだ。もの作りという実業に興味があったのかもしれない。しかし、四郎は大正十（一九二一）年に、満四十歳で早すぎる死を迎えてしまう。社長としてはたった十三年間で

の資料とリボンの見本帳、百年の眠りが覚め、まだぼんやりとしているようである。二〇一六年九月には千駄木の「古書ほうろう」を会場に展示会が行われた。谷中の二屋根会の仲間たちは論文も書いて産業考古学会で発表もした。そして今回、こうして読者の皆さんにも、その一端をお見せする。草創期の国産リボンや渡辺四郎さんについてご存知のことがあれば是非ご教示ください。私たちはこれからもこの資料を大切にしかるべきところで保管し、リボンたちの謎を解いていきたいと思っています。そして工場の残された部材をできるだけ工場のあった近くに復元したいという望みを捨ててはいない。

（協力：山崎範子、谷中の二屋根会）

谷中で生産されたと思われるリボンの見本帳。



もりまゆみ
作家。一九五四年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業、東京大学新聞研究所修了。出版社で企画・編集を手がけた後フリーに。八四年、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」創刊、二〇〇九年まで編集人を務める。「谷根千」の冒険（福外の坂）、「彰義隊遺聞」「環境と経済がまわる、森の国ドイツ」「千駄木の漱石」「昭和の親が教えてくれたこと」「谷根千」地図で時間旅行など著書多数。